

# 湖国で輝く 企業を 訪ねて



## 納期やコストにも配慮 技術と経験でお客様の希望を形に

京都にあった特殊造形の会社で、営業兼製作スタッフとして働いていた古高新也さんが、「工房 新」として立ち上げたのは13年前のこと。マネキン人形の発祥地とされる京都には、その技術を生かしてVP（ビジュアルプレゼンテーション）とも呼ばれる特殊造形を製作する会社为数多くあります。

平成13年に大阪にユニバーサル・スタジオ・ジャパンが開園されたこともあって、よりクオリティの高い特殊造形へのニーズがこの頃から高まってきました。

工房では、デザイン画などを見ながら、FRP（繊維強化プラスチック）やEPS（難燃性発泡スチロール）などを使って、テーマパークの造形物のほか、キャラクター人形や立体看板、店舗の内外装、ショーウィンドウのディスプレイ、テレビ番組のセット、モニュメント、擬岩、擬木などを製作しています。FRPは自動車のパーツや小型ボートなどにも使用されていて、軽量で強度が高く、経年劣化が少ないといった利点があります。

特注品のため同じものを作ることはまずないので、その都度作り方を検討し、製作工程



# 試行錯誤の繰り返しから生まれる 表現力豊かな立体造形

□ 株式会社 工房 新 □



本社／滋賀県大津市和邇南浜297-4  
設立／平成14年4月  
事業内容／店舗・テーマパーク・テレビ局などの  
モニュメントや立体看板など  
URL／<http://www.studio-arata.jp>

Studio  
**ARATA**  
Co., Ltd.  
frp arts display sign ornament digital  
[www.studio-arata.jp](http://www.studio-arata.jp)

代表取締役  
古高 新也氏



で試行錯誤を繰り返し、現場に行ってから、微調整を繰り返します。「苦労や工夫なしに納品できたものはない、と言っても過言ではありません」と古高社長が言われるように、芸術作品と違ってあくまで商美術であるため、納期に間に合うような工程管理やコスト管理も必要になります。これまでの経験やノウハウを生かして、いかに柔軟な発想でお客様の求めるものを製作できるかがポイントになります。

## 厳しさの中に見出すものづくりの喜び

もともと営業畑出身ですが、長年製作も手がけてきた古高社長は、細かなパーツなどが必要になった時、ホームセンターのどこになにかあるかを把握されていて、すぐに調達するなど、さまざまな側面からものづくりを支えています。

今は極力、製作は工場長以下4名のスタッフに任せていますが、納期が迫ると現場を手伝ったり、大掛かりな仕事の場合は、クリエイターやものづくりをしている人たちに手伝いを頼み、15、6名のチームで製作することもあります。お客様が納得するまで、何度も作り直したり、納品先で急遽やり直しになったりすることもあり、肉体的にも精神的にも厳しい仕事ですが、それだけにお客様から「いいものができた」と言われた時の喜びは大きいと話されました。

また、テーマパークに行った人から、「見て来たよ!」「すごいね。一体どうやって造ってるの?」などと言われた時には、この仕事をやってきて本当に良かったと思われるそうです。

納品先は全国に広がり、街角でも多くの人々の目にふれて、親しみを感じてもらっていることも励みになっています。例えば、佐賀県鳥栖市にあるモニュメント「平和の鐘」の男の子2人と女の子は、立体感を見るために古高社長のお子さん達に協力してもらって製作し、記憶に残る仕事となりました。

課題は、若い後継者をいかに育てるかということです。粉ゴミが多く出る、いわゆる3K、4Kの職場で、美術系の大学などに求人を出してもなかなか採用に至らず、せっかく採用しても長続きしないということが業界全体で問題になっています。「納期の厳しい仕事が重なったりすると挫折してしまう。それを乗



「平和の鐘」

り越えられたら、やり甲斐や喜びをもっと感じてもらえるはず」と、この仕事への理解が進むことを期待されています。

## オリジナル商品の開発や個人顧客の開拓にも取り組む



同社ではホームページを活用して、新たな取引先や個人からの受注を掘り起こすなど、今までなかったルートの開拓にも取り組み出しています。

個人顧客向けには、ブライダル用の新郎新婦の人形や、還暦や子どもの日のお祝い用の人形、ペットのフィギュアなどのニーズを想定しています。なくてもいいものかもしれませんが、あれば話題提供やイメージづくりでビジネスの発展に貢献したり、個人の場合は暮らしに楽しさをプラスできるのが商品の強みになります。

また、今後はオリジナル商品の開発と販売にも力を入れていく予定です。現在、既存商品としてローマの教会にある「真実の口」を模した立体造形がありますが、例えばギターなどの立体造形を商品化して、ショップやライブハウスなどで使ってもらうなど、いろいろな利用法を提案していくことになります。他にも、特殊造形以外の商品開発を目指し、新ブランド「kappo」を立ち上げたところです。これは古高社長の夫人が洋裁の技術を生かして、割烹着を今の若い人たちにもっと愛用してもらえるような、おしゃれな生地やデザインで提案するものです。

「弊社もこれまで信用保証協会に支えていただき、資金面での支援があるということで、一つでも心配が解消されると、それだけ本業に専念できます。これからビジネスを展開していこうという若い人たちの支援など、夢を持ってがんばっている人たちを、今後も側面から応援してあげてほしい」と古高社長。技術やアイデアで、厳しい時代を切り拓いていこうとする若手起業家を応援したいという思いが伝わってきました。



新ブランド「kappo」が提案するおしゃれな割烹着

## 企業ポリシー

- 特殊造形を通して  
楽しさや感動体験を提供
- 技術やノウハウを  
次世代に継承
- ものづくりを通して  
子どもたちの感性を育む



## Message

### 夢や感動を与えるものづくりの魅力を伝えたい

3Dプリンターなど機械の技術も進歩していますが、私たちの仕事は最後は人間の手で仕上げる必要があります。人の手だから出せる揺らぎや、不整合を加えることで、生き物らしくなるからです。

この人の手による技を次世代へ継承していくことが、ものづくり企業の経営者としての使命であると思っています。

そして、特に子どもたちの心を引きつけるもの、感動体験として長く思い出に残るものなど、夢や感動を与えるものづくりを目指していきたいと考えています。